

## レファレンス

## コーナー

## アジア資料の保存問題

鈴木陽子

アジア経済研究所図書館では、創立以来、発展途上地域の新聞をマイクロフィルムに撮影して保存してきた。これはスペース節約の観点からは効果的な手段だが、調査の結果一九六〇年代に使用したマイクロフィルムに劣化がおきていることが判明している。また紙媒体の資料は、古いものでは一九世紀末に出版されたものも所蔵しているが、ここ数年劣化が著しく閲覧に供することのできない資料が増えてきている。Royal Thai Government Gazette (タイ語) は、一八七五年から一九三三年までの資料の劣化がとくに顕著で、閉架式の書庫に移動して閲覧を制限している。他に発展途上地域で出版された資料や旧南満洲鉄道の出版物など

当図書館しか所蔵していないもの、また出版された国においてさえ見ることのできない貴重な資料が劣化の危機にさらされている。図書館では一般にこのような問題にどのように対処しているのだろうか。日本における資料保存活動の現状を紹介してみよう。

日本図書館協会では、酸性紙の問題が注目されるようになった一九八五年から年四回から五回のペースで「ネットワーク資料保存」というリーフレットを発行している。現在は「資料保存委員会」の編集で刊行されており、二〇〇三年七月に第七〇号が発行された。第五八号には「東京修復保存センターにおけるベトナム歴史文書の保存修復協力の現状」(二〇〇〇年)、第六四号には「モロッコにおける資料保存について」(二〇〇一年)など、国際協力に関する記事も掲載されていて興味深い(詳しくはホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/ahozon>参照)。また同ホームページにはPDF版「リーフレットと資料保存」が掲載されている。そのなかの「資料保存O&A」によると、中性紙の寿命は二五〇年から七〇〇年、酸性紙はその四分の一、電子メディアは「寿命について未知の部分が多いため、長期の保存に適しているかどうか判断を下しにくいのが現状です」とされている。わが国唯一の納本図書館・保存図書館である国立国会図書館では、資料を原形のまま保存すること

を原則としており、資料保存活動を推進してきた。同図書館のホームページ内にある「国会図書館について」を開くと「資料の保存」という項目があり(<http://www.ndl.go.jp/p/abouts/data/preservation.html>)、①環境管理(保存)、②利用制限(貴重書の選定)、③酸性紙対策、④メディア変換(マイクロロ化、電子化)の四項目が保存活動としてあげられている。平成一四年度からは、「紙媒体の寿命とくらべて、電子媒体の寿命は著しく短い」との認識から電子情報の長期的保存とアクセス手段の確保のための調査研究を開始した。PDF版の「マイクロフィルム保存のための基礎知識」によると、二五年から三〇年以上を経過したマイクロフィルムが、「ある保存条件のもとで酢酸臭を発生し、劣化をおこすことが判つたのはおよそ一〇年まえのこと」と述べられている。冒頭に紹介した当図書館のマイクロフィルム資料の劣化もこれに該当すると考えられる。

国立国会図書館は国際図書館連盟の資料保存コア・プログラム(FLAPAC)アジア地域センターとしても活動しており、その活動がホームページに紹介されている。

昨年一月に開催された第五回図書館総合展のフォーラム「アメリカの図書館界を支える実践的資料保存」(ブリザーベーション・テクノロジー社主催)では「アメリカ議会図書館における資料保存の最新実

践」と「デジタル化から回帰するアメリカ図書館の資料保存」についての講演が行われた。それによるとアメリカ合衆国会図書館では資料保存を実践することにも、その技術調査・実験の結果などをホームページで公開して図書館の資料保存活動を支援している。メリーランド大学図書館では、一八三〇年から一九八〇年までに製造された紙は近い将来酸性劣化してしまう可能性があるとの認識から蔵書調査を行っている。その結果四七％が酸性紙であり、その三分の一にあたる一六％は既に劣化が始まっている。残りの三三％はまだ劣化が始まっていないので、計画的に大量脱酸処理を行っているという。酸性紙を中和する方式が、紙媒体の寿命を三倍にも延ばす一番安価な方式として紹介されている。

当図書館では蔵書の劣化、酸性紙の調査を体系的に行ったことはないが、いわゆる先進国で問題となる酸性紙の問題のほかに、発展途上地域資料を収集していることから、良質でない劣化が進みやすい紙による資料が多いという特殊な事情がある。劣化が始まってしまつてからでは講じられる対策も限られるうえ、費用も割高になってしまつてしまうと、一刻も早く実態の調査を行う必要があるだろう。デジタル化の陰に隠れがちであるが、地道な対応をしいかねばならない問題である。

(すずき ようこ)アジア経済研究所図書館